

「救急疾患の画像診断」

聖マリアンナ医科大学教授 石川 徹 編集

杏林大学助教授

蜂 屋 順 一

救急疾患のみを対象とした画像診断の教科書としては本邦では本書が最初のものであると言ってよいだろう。編者の聖マリアンナ医大放射線科石川徹教授と同科の主要スタッフとが中心になって分担執筆したものであるが、救急医療に取り組む人々には参考になるところが大きいと思われる。

救急医療の放射線診断に関するテキストとしては、従来は例えばHarris & Harrisの「The Radiology of Emergency Medicine」(Williams & Wilkins Co, Baltimore, 1975)があった。ほぼ10年前に刊行されたその初版本と今回の石川氏らのテキストの内容を比較してみると、後者にはこの10年間に爆発的に起こった種々の新しい医用画像診断の進歩が鮮やかに刻み込まれていて、この分野でも大きな変革が生じたことが判然とする。特にCTスキャンの影響は頭部に限らず全身の救急診

療において明らかであり、“CT前”と“CT後”では診断の進め方に根本的な変化の生じた領域も少なくなることが示されている。非侵襲的で簡便な超音波診断の特性も救急疾患の診断にはよく生かされ、例えば急性腹症、閉塞性黄疸、心タンポナーデなどの迅速な診断に頻用されるばかりでなく、超音波ガイド下に行う穿刺吸引や経皮的ドレナージなどの技術の役割も大きい。血管撮影とこれを利用した救急治療もこの10年間に画期的な進歩をみた。これらの新しい診断法が盛り込まれている点が本書の特色の1つではあるが、単純X線撮影を主とする従来の放射線診断の定石が軽視されているわけでは決してなく、むしろ多くの場合に最も重要なのは単純撮影や簡単な造影検査が適正に行われ正確に読影されることであるという点が繰り返し強調されている。単純撮影をちょっと工夫するだけで目的を果たしう

状況下で、不必要に高価な検査や侵襲度の高い検査を行うようなやり方を本書は“斧でハエを殺すような診断”と称して、いましめている。

各論は頭部、胸部、心大血管、骨、腹部などの領域ごとに記述され、更に小児の項および救急診療時にみられる医原性合併症の項が設けられている。収録されている画像は救急疾患という特殊性から画質的には必ずしも美しいものばかりではないが、よくトリミングされ適切な解説が加えられて説得性のあるものが多い。冒頭の約20頁は総論的記述であり救急医療における画像診断の在り方や放射線診療の管理面、コンピューター利用の工夫などに関して著者らの考え方が示されている。

本書は救急疾患の画像診断に関するエンサイクロペディアと言うよりは、むしろ多くの臨床医、放射線科医が390頁の全体を通読すべきテキストであるように思う。救急医療は臨床医学にかかわるあらゆる問題が最も凝縮した形で露呈する場である。本書は単に最新の診断学的知識を提供するばかりではなく、救急医療システムそのものについても考えさせられる多くの内容を含んでいる。

B5判 414頁 1984年 13,000円
送料400円 医学書院 刊